

デジャヴ

2007(平成19)年1月25日鑑賞(試写会・ナビオ TOHO プレックス)

★★★★



監督＝トニー・スコット／製作＝ジェリー・ブラッカイマー／コンサルタント＝ブライアン・グリーン／出演＝デンゼル・ワシントン／ポーラ・パットン／ヴァル・キルマー／ジム・カヴィーゼル／アダム・ゴールドバーグ／ブルース・グリーンウッド／エルデン・ヘンソン／エリカ・アレキサンダー（ブエナビスタ インターナショナル（ジャパン） 配給／2006年アメリカ映画／127分）

……「デジャヴ」＝「既視感」とは、はじめてなのになぜか過去に体験したような奇妙な感覚になることで、誰しもそんな経験があるはず……？ もしあの時、〇〇だったら……？ もし△△していれば、××だったかも……？ そう考えればキリがないが、この映画では2度のオスカーに輝くデンゼル・ワシントンがそんな大胆なチャレンジを……？ もっとも、現代物理学の粋を集めた科学論争は難解そのものだから、それに騙されないように……。何よりも大切なのは、あなたの直感力、観察力そして分析力なのだから……？

デジャヴとは……？ タイムスリップとは……？

デジャヴはフランス語で、日本語では既視感と訳されている。これは、はじめて体験することなのになぜか過去にどこかで体験したような気持になるあの奇妙な感覚のこと。これは誰もがさまざまなパターンで体験するもので、歌の歌詞にも時々使われている……。ちなみに私の大好きなZARDの坂井泉水が歌う『眠れない夜を抱いて』の中には、「ざわめく都会の景色が止まる あの日見たデ・ジャ・ヴと重なる影 もしもあの時出逢わなければ 傷つけ合うことを知らなかった いじわるに言葉はすれ違うけど 愛を求めてる」との歌詞が……。

これに対し、タイムスリップとは、現在から過去や未来へ時空を超えて移動することで、これをテーマにした映画はたくさんあり、傑作も多い。難点は共に難しいこと。この映画はデジャヴとタイムスリップの両方が絡んでいるだけに難解

だから、観終わった後、グッタリと疲れることまちがいなし……？

ちなみに、1月27日に訪れた山口県の湯田温泉は、作家（詩人）中原中也の出生地、そして日本海沿いにある仙崎は童謡詩人、金子みすゞの出生地だが、なぜか観光各地に飾られているそれらの写真にも、「デジャブ山口」の文字が……。

ATF って、ナニ……？

この映画の主人公は ATF の敏腕捜査官ダグ・カーリン（デンゼル・ワシントン）。ATF とは、アメリカの連邦法執行機関の1つ、アルコール・タバコ・火器局の略称とのことだが、ATF という組織が本当にあるのか、またなぜ主人公を ATF の捜査官に設定したのかはよくわからない。彼がすごいのは犯罪捜査の現場における観察力、洞察力、直感力そして分析力。そんなキャラに最適な俳優は今や、絶対デンゼル・ワシントンをおいて他にいない……。

助手を演じたアンジェリーナ・ジョリーとの二人三脚で犯人を追いつめていった『ボーン・コレクター』（99年）は絶品だったが、デンゼル・ワシントンが演じた主人公は寝たきり状態だったから、あくまで静の演技。ところがこの『デジャブ』では、4日と6時間前の過去と現在を忙しく行ったり来たりしなければならない動の演技だから大変……。

現代物理学のコンサルタントが不可欠……？

この映画のポイントは、7機の軌道衛星から送られてくるデータを処理することで、ターゲットエリア内であればどんな角度からでも自由に映像をタイム・ウィンドウに映し出すことができるというプログラムを理解すること。これは簡単に言うと、他人の生活を100パーセント丸裸にできる監視カメラということだが、面白いのはそこにいくつかの限界があること。その限界とは、①4日と6時間前の映像に限られ、②1度しか見ることができず、③1カ所のポイントからしか見ることができないこと。そのため、今、どこを見るべきかの判断が大切になるから、ダグにその捜査の協力が求められたわけだ。

このようにこの映画は、現代物理学の最先端知識を駆使したもの。したがってこの映画には、コンサルタントとしてのブライアン・グリーンが不可欠

……？ 彼はハーバード大学を卒業し、コロンビア大学のヒモ理論、宇宙論および天体物理学学会の共同責任者を務めているという、その道のプロ。したがって映画の中で語られるさまざまな物理学の理論は、彼の科学的論証を得たものらしい……。しかし、私には何のことかさっぱりわからず、チンプンカンプン……？

最初のシーンは現実、それともデジャヴ……？

2005年8月に起きたカトリーナと名付けられたハリケーンによって、ニューオーリンズは壊滅的な打撃を受けた。ジャズで有名なニューオーリンズはアメリカ南部のルイジアナ州にあるが、プレスシートによれば、「今なお18～19世紀の建物が残り、植民地時代の面影を感じさせる歴史都市。古さと新しさが入り混じったこの街には時の流れが止まったような情緒があり、ここを訪れた観光客はどこかノスタルジックな錯覚に囚われる。そんなニューオーリンズ特有の街並みは、“デジャヴ”や“時間”というモチーフを扱った本作の舞台にうってつけだった」とのこと。

そんな、ニューオーリンズにおける全米最大のカーニバルが“マルディグラ”。映画の冒頭はその“マルディグラ”を祝うため、海軍基地の多くの水兵とその家族たちがミシシッピ川を運航するフェリー“スタンプ号”に乗り込んでいくシーン。岸壁を離れたフェリーの中には音楽が流れ、みんなが心から“マルディグラ”を祝っているあの顔、この顔、そしてあの笑顔、この笑顔がいっぱい……。

ところがそんな中、ある車の中から音楽が流れていたため、警備員がその車をのぞき込むと、その中には複雑な配線を施されたプラスチック容器が……。そして次の瞬間、その大爆発によってフェリーには爆風が吹き上げ、またたく間にフェリーとミシシッピ川は地獄絵の様相を……。走馬燈のようにそんなシーンが流れていくが、果たしてこれは現実、それともデジャヴ……？

美女の顔見せは、死体から……

この映画のヒロインであるクレア・クチヴァーには、映画出演2作目のポーラ・パットンがプロデューサーのジェリー・ブラッカイマーによって大抜擢されている。たしかに姿カタチも演技力もその抜擢に応えるものだが、かわいそうな

のは、その初顔見せが死体からだということ……。つまり、彼女も“スタンプ号”の大爆発によって、岸辺に流れついた死体の1つとして処理されようとしていたわけだ。

もっとも、これが発見されたのは爆破事件の1時間前。しかも、その顔や身体は部分的に焼け焦げているが、何と左手の指がすべて切断されていたから、その死体を見たダグは直感的にいろいろと感じるものが……。そんな死体に対して、不思議な“デジャヴ”を感じたダグは「彼女は美しい」とそっと呟いていたが……。

FBIは特別捜査班を編成したが……

これだけの爆発事件だから、FBIが動き、特別捜査班が編成されたのは当然。その責任者プライズワラ（ヴァル・キルマー）が、ATFの捜査官にすぎないダグの能力を高く買い協力を要請したのは、縦割り行政になりがちな組織の長としては立派なもの……。もっとも、プライズワラやその配下のデニー（アダム・ゴールドバーグ）らの説明には、もっともだと思わせる反面、どことなく怪しげな雰囲気がある。私と同様に（？）ダグもそう感じていた様子……？

すべての私生活を完全にタイム・ウィンドウ上に映されている彼女が、なぜかダグを見つめ、「誰がいるの？」と訝しげに尋ねるのは一体なぜ……。またタイム・ウィンドウを見ているダグが、既に死んだはずのクレアに対して、懐かしい気持を抱くのは一体なぜ……。今、タイム・ウィンドウ上に映っているクレアの映像は本当に彼女の過去の映像……。そして彼女は本当に既に死んでいるの……。ベテラン捜査官のダグですらこんな風に頭が混乱しているのだから、それを観ている観客の頭が次第にパニック状態になってくるのは当然……。？

イエス・キリストが悪役に……。？

メル・ギブソン監督の『パッション』（04年）（『シネマルーム4』261頁参照）は全世界に衝撃を与えたが、そこでイエス・キリストを演じたのがジム・カヴィーゼル。俳優は1度あまりにも目立った役を演じてしまうとそのイメージが離れられなくなって苦労することが多いはず……。そんなジム・カヴィーゼルがこの『デジャヴ』ではテロリストのオースタッドを演じているから、それにも注目！

橋の上でバイクを停めてフェリーを眺めていた彼が不審人物としてチェックされたのは、ダグの観察力によるところ大だが、カメラではその顔まではっきりわからないところがミソ……。デジャヴをテーマとしたこの映画はちょっと難しすぎる面があるが、面白さは相当なもの。しかしその謎解きの面白さはほとんど犯人を追う側におかれているため、犯行の動機を含む犯人側の事情についてはほとんど描かれていないのが少し難点……。したがってイエス・キリストを演じたジム・カヴィーゼルが、なぜこの映画ではスタンプ号を爆破する犯人となったのかは基本的にナゾ……？

もしあの時〇〇していれば……？

タイムスリップもの映画でも、もしあの時〇〇していれば、△△になっていたはずだ、という問題提起がされることがよくある。それは誰もが考えることだが、どうも科学的にはなかなか難しいらしい……？

インターネットのチャットルームから始まったという、この『デジャヴ』の企画は、どうもそれと同じ発想だったよう……。それは、最初のカーニバルのシーンや爆発シーンが少し現実性の薄いカメラ撮影でされていることや、いきなりヒロインが焼け焦げた死体で登場してくることからもよくわかる……。すなわち、あの時〇〇が△△していれば、スタンプ号の爆発もクレアの死亡もなかったのでは、というのがこの映画の発想の基本……？

何となくそれはわかるが、その解明のためにこの映画（脚本）が考えついたストーリーは難解そのもの。『パイレーツ・オブ・カリビアン』（03・06・07年）をはじめとして、『コン・エアー』（97年）や『アルマゲドン』（98年）など誰にでもわかりやすい娯楽映画を多数製作してきたジェリー・ブラッカイマーが、こんな難解な脚本について、「脚本を受け取って48時間後には、もう買っていたんだ」と語っているのは少し意外……。もっとも小難しい科学論争とは別にトニー・スコット監督が用意した、ダグがオースタッドを追う衝撃のカーチェイスシーンは時間軸を絡めた新機軸で、やはり娯楽大作にふさわしいもの……？

2007(平成19)年1月29日記